



“人間は素晴らしい”

園長 高杉 洋史

子育てラウンジの入り口に数冊の本を飾っているのですが、長らく読もう読もうと思いつながら、積読(つんどく)状態でした。その中に「虚数の情緒」という一冊があります。千ページを超す大冊で、タイトルからもわかるように数学本と予想が付きまします。お正月休みにとうとう手を付けました。68ページを読んでいくところですが、なんと、まだ数学の話どころか、虚数という単語すら出てきません。ここまでの話はなんと、勉強することはなぜ大切なのかということ、そして地球と人類の歴史がこんこんと語られています。前書きを読んでわかったのですが、この本は中学生が独学するために書かれた本なのです。難しい漢字には読み仮名がふつてあり、この本を読むのに必要なものは根性だけというくらい懇切丁寧な書き方です。そして私にとっては、教育とは何か、教育者とはどうあるべきかを再考するよう促された本でした。気合の入った巻頭言の書き出しを引用します。

「さあ諸君、勉強を始めよう勉強を。数学に限らず、凡そ勉強なんてものは、なんだつてつらくて厳しい修行である。しかし、それを乗り越えた時、自分でも驚くほどの充実感と、学問そのものへの興味が沸き起つてくる。昔から、楽しんで得られるものなんて、つまらないものに決まっている。怠けを誘う甘い言葉は、諸君に一人前になつてもらいたくないという嫉妬である。思い切り苦労して、一所懸命努力して、素晴らしいものを身に着けようではないか。」

自分の腑抜けた精神が恥ずかしくなる言葉です。世の中には気合の入った教育者がいるものです。

もう一冊は神谷美恵子著「ころの旅」です。1982年発行の古い本が大掃除とともに出てきました。生物学や生理学をはじめ新しい知見からすると抵抗のある記述もありますが、35年間の進歩を感じ取れます。それ以上に幅広い知見と人に対する温かい記述、特に幼児の発達に対する視点は昨今の待機児童問題に振り回されている幼児教育の世界がいかに子どもを忘れた、大人の都合でなされていることが反省させられ、地に足の着いた幼児教育をするのだよと励まされている心境です。

自分の知らない素晴らしい人たちが綺羅星のごとく存在することを思い出させてもらいました。

